

1 沙石集

故(注1) 相州さうしゅう禅門ぜんもんの中に、(注2) 祇候しごうの女房ありけり。腹

あしく、(注3) たてだてしかりけるが、ある時**成長の子息**

の、同じくつかまつりけるを、いささかの事によりて腹

を立て、打たむとしけるほどに、物にけつまづきていた

く倒れて、いよいよ腹をすゑかねて、禅門に、「子息

某それがし妾わらはを打ちて侍り」と、訴え申しければ、「不思議の

事なり」とて、かの俗を召して、「まことに母を打ちた

るにや。母しかしか申すなり」と問はる。「まことに母

を打ちて侍り」と申す。禅門、「かへすがへす奇怪なり。

不当なり」と叱りて、所領を召し、流罪に定まりにけり。

ことにがにがしくなりける上は、腹も漸やうやく癒えて、あ

さましく覚えければ、母、また禅門に申しけるは、「腹

の立つままに、この俗、我を打ちたりと申し上げて侍り

つれども、まことはさること候はず。おとなげなく彼を

打たむとして、倒れて侍りつるねたさにこそ訴へ申し候

ひつれ。**まめやかに御勤当候はむことはあさましく候ふ。**

許させ給へ」とて、けしからずまたうち嘆き申しければ、
「さらば召せ」とて、召して事の子細を尋ねらる。「ま
ことには**いかで母をば打ち候ふべき**」と申すとき、「さ
らば、など初めよりありのままに申さざりける」と、禅
門申されければ、「母が打ちたりと申さむ上には、**我が**
身こそがにもしづみ候はめ、母を(注4)虚誕きよたんのものに
は、いかなし候ふべき」と申しければ、いみじき至孝
の志深きものなりとて、大きに感じて、なほ別の所領を
添へて(注5)給はり、殊に(注6)不便ふびんのものに思はれけり。
末代の人の中には、ありがたく、めづらしくこそ覚ゆ
れ。

(注)

- 1 相州禅門：北条時頼。鎌倉幕府五代執権。
- 2 祇候：そば近くお仕えすること。
- 3 たてだてしかりけるが：強情な性格であったが。
- 4 虚誕：嘘つき
- 5 給はり：ここでは「給ひ」と同義の尊敬語として使われている。
- 6 不便のもの：かわいい者

今は亡き相州禅門（北条時頼）家に、お仕えしている女房がいた。短気で、強情な性格であったが、ある時**成人した息子で、母と同じく相州禅門にお仕えしていた息子**を、些細なことが原因で腹を立て、打とうとした時に、物にけつまずいてひどく倒れて、ますます苛立ちを抑えることができなくて、禅門に、「息子が私を打ちました」と訴え申し上げたので、（禅門は）「思いがけないことだ」と言って、その俗人【**〓息子**】をお呼びになって、「本当に母を打ったのだろうか。母はこれこれだと申しているぞ」と（息子に）お尋ねになる。（息子は）「本当に（私が）母を打ちました」と申し上げる。禅門は、「まことに不可解なことである。よくないことだ」と叱って、領地をお取り上げになり、（息子は）流罪に決まってしまった。事態がまずいことになってから、（母の）怒りも次第に収まって、（息子の処罰が）思いがけないことに思われたので、母が、また禅門に申し上げたことは、「腹が立つのにまかせて、この子が私を打ったと申し上げましたが、本当はそのようなことはありません。（私が）大人げなくあの子を打とうとして、倒れました悔しさで（あのように）訴え申し上げたのです。**本格的にお咎めがございませんようなことは思いがけないことでございます**。お許しください」と言って並々でなくまた嘆いて申し上げるので、（禅門は）「それならば（息子を）呼べ」と言って、お呼びになつて詳しい事情をお尋ねになる。（息子が）「本当は**どうして母を打つことができましょうか、いやできません**」と申し上げると、「それでは、なぜ初めからありのままに申し上げなかったのか」と禅門が申し上げなされたので、「母が打ったと申し上げたからには、**私自身が処罰を受けることがあることも**、母を嘘つきにどうしてすることができましょうか、いやできません」と申し上げたので、たいそう孝行の心の深い者であると言つて、大いに感心して（本来の領地の他に）さらに別の領地を加えてお与えになり、格別にかわいい者だと思ひになった。

末世の人間の心としては、めつたになく、すばらしいものだと思われる。

2 宇津保物語

次の文章は五歳の藤原仲忠が母のために食べ物を探して山中を歩きまわる場面である。

かく遙かなるほどをし歩くも苦しう覚えて、「いかで

この山にさるべき所もがな。近うて養はむ」と思ひて、

山深く入りて見れば、いみじういかめしき杉の木の、四

つ物を合はせたるやうにて立てるが、大きな屋のほど

に空き合ひてあるを見て、この子の思ふやう、「ここに

わが親を据ゑ奉りて、拾ひ出でむ木の実をもまづ**参らせ**

ばや」と思ひて寄りて見るに、いかめしき牝熊、牝熊、

子を生み連れて棲む空洞なりけり。出で走りて、この子

を食まむとする時に、この子のいはく、「しばし待ち給

へ。まろが命絶ち給ふな。まろは孝の子なり。親はらか

らもなく使ふ人もなくて、荒れたる家にただ一人住みて、

まろが参る物にかかり給へる母を持ち奉れり。里にはす

べき方もなければ、かかる山の木の実、葛の根を採り

て親に参らするなり。高き山、深き谷を下り登りまかり

歩いて、朝にまかり出でて暗うまかり帰るほどだに、うしろめたう悲しく侍れば、かかる山の王棲み給ふとも知らで、この木の空洞に母を据ゑたてまつりて、薯いもひとすぢを掘り出でて、まづまゐらせむ。

また、遠き道をも親のためにとまかり歩けば、苦しうもおほえねど、つれづれと待ち給ふらんと悲しう侍れば、近くと思う給へて見侍りつるなり。むなしくなりなば親もいたづらになり給ひなむ。おのが身のうちに親を養はむに用無き所あらば施せし奉るべし。足無くはいづくにか歩かむ。手無くは何にてか木の実、葛の根をも掘らむ。

口無くはいづくにか魂通はむ。腹、胸無くはいづくにか心のあらむ。この中にいたづらなる所は、耳のはた、鼻のみねなりけり。これを山の王に施し奉る」と、涙を流して言ふ時に、牝熊、牡熊、荒き心を失ひて、涙を落として親子のかなしさを知りて、二つの熊子どもを引き連れて、この木のうつほのこの子に譲りて、他峰こに移りぬ。

こんなに遠い道のりを(食べ物を探し求めて)歩き回るのもつらく思われて、「何とかしてこの山に(母を養うのに)ふさわしい場所があったらよいのに。そばにいて(母を)養いたい」と思つて、山深く入つて探すと、非常に大きな杉の木で、四本物を合わせたように立っている木(の根本)が、大きな家ぐらいに空いているのを見て、この子が思ったことには、「ここに私の親を住ませ申し上げて、拾ってきた木の実をまず差し上げたい」と思つて、近寄つてみると、恐ろしい牝熊と牡熊が子どもを産んで一緒に住む洞穴であつたのだよ。(熊が)走り出て、この子を食おうとする時に、この子が言うことには、「しばらく待つてください。私の命をお断ちになるな。私は親孝行な子である。親兄弟もなく使用人もいなくて、荒れた家にたった一人で住んで、私が差し上げる食べものに頼つていらつしやる母を持ち申し上げている。人里では生活の手立てがないので、このような山の木の実や、葛の根を採つて親に差し上げるのだ。高い山や、深い谷を降りたり登つたり歩き回つて、朝に家を出て暗くなつてから帰ることでさえ、母が気がかりで悲しいですので、このような山の王が住みなさつているとも知らないで、この木の洞穴に母を住ませ申し上げて、芋一本を掘り出しても、まず差し上げよう(と思つて近寄つたのだ)。また、遠い道のりでも親のために(食べ物を手に入れよう)と思つて歩き回るのだから、つらくも思わないけれど(母が)所在なく待つていらつしやるであろうと(思うと)悲しゅうございますので、近くで(母を)養いたいと思つて見ていたのです。(私が)死んでしまったなら、親もきつと死んでしまいなさるでしょう。私の身体の中で親を養うのに必要のない所があるなら差し上げよう。(しかし)足が無かつたらどこに歩いていけようか、いや、どこにも行けない。手が無かつたら何で木の実や、葛の根を掘ろうか、いや、掘ることはできない。口が無かつたらどこで心を通わせようか、いや心を通わせるにははばきない。腹や胸がないならどこに心が宿ろうか。この中で不要な所は、耳たぶと、鼻柱だけであつたよ。これを山の王(であるあなた)に差し上げよう」と涙を流して言うのと、牝熊と牡熊は、荒々しい心を無くして、涙を流して親子の情愛を知つて、二頭の熊は子供を引き連れて、この木の洞穴をこの子に譲つて、他の峰に移つた。